論 文 の 和 文 要 旨

論文題目	日本語と韓国語における所有表現の対照研究 — 所有に見られる連続的様相と機能の棲み分け
氏　　名	韓　必南

本論文は，日本語と韓国語におけるいくつかの所有を表す形式—「ある/いる」「있다」，「もつ」「가지다/갖다」，「する」「하다」，「の」「의」—を研究対象として，対照言語学的な観点に基づきつつ，①各所有表現における所有物の分類度，②動詞文，形容詞文，コピュラ文に繋がる「所有」の連続的様相，③連体修飾における動詞による所有表現と名詞による所有表現の機能の棲み分け，の3点について明らかにすることを目的とするものである。

本論文における資料は，日本語に関しては，国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の文学作品(小説)を検索範囲として国立国語研究所公開の索引検索ツール「中納言」を利用した。韓国語に関しては，現代韓国語の研究・教育用に作られた『21世紀世宗計画研究・教育用現代国語均衡コーパス(KNC)』の文学作品(小説)とKNCの検索ツール「글잡이」を利用して分析を行った。主に名詞(句)の意味論的機能に注目しつつ，それぞれのコーパスから得られた実例の分析を通して，日本語と韓国語の所有表現における上述の①～③について考察を行った。

本論文は大きく，序章，第1章：本稿に直接関わる先行研究，第2章～第4章（第Ⅰ部）：所有動詞による構文，第5章～第6章（第Ⅱ部）：連体修飾による所有表現，第7章：結論で構成されている。第Ⅰ部では，所有動詞による構文について，各構文の使用実態，所有物の分布をはじめとする意味的，統語的特徴について考察した。第Ⅱ部では，所有動詞による連体修飾節と属格構造を検討した上，両者の相補的な分布および日本語と韓国語での共通点と相違点を示した。

本論文での考察の結果を次にまとめる。

【第Ⅰ部—所有動詞を述語とする構文】

第2章で扱った「ある/いる」構文については，西山佑司(2003, 2004) による存在文の分類に加え，「生起存在文」「属性数量詞存在文」「様態存在文」「[NP-TOP NP-LOC V]型措定存在文」「倒置指定存在文」という新たな文型を実例とともに示した。日本語と韓国語の対照言語学的な観点から「있다」構文を検討した結果，「ある/いる」構文のうち〈属性数量詞存在文〉を除き，対応する文型があるということがわかった。

また，「있다」構文には，「ある/いる」構文には見られない，「時間経過存在文」「[NP-TOP NP-INS V]型措定存在文」ともいえる文型も観察される。

存在文のうち，〈所有文〉〈属性数量詞存在文〉〈[NP-TOP NP-LOC V]型措定存在文〉〈[NP-TOP NP-INS V]型措定存在文〉〈実在文〉は，措定コピュラ文の意味構造を有するタイプとみなしうる一方，〈倒置指定存在文〉〈リスト存在文〉〈帰属存在文〉は指定コピュラ文の意味構造を有するタイプとみなしうる。さらに，これらのいずれの意味構造にも当てはまらない文型として〈絶対存在文〉〈時間経過存在文〉があげられる。

益岡隆志(1987) の「叙述の類型」の観点から考えると，すべての文は「事象叙述文」または「(準)属性叙述文」のいずれかに当てはまるということであるが，少なくとも「指定構造存在文」やもっぱら抽象的な「変項の値の有無」を表すという〈絶対存在文〉は，いずれの類型の特徴も有していない。したがって，益岡隆志(1987) の「叙述の類型」は網羅的であるとは言い難く，新たな類型を認めることが必要であると思われる。

所有物の分類に注目すると，「ある/いる」や「있다」による所有文では，「一緒に行く人／見せたいもの」「사랑하는 사람／먹고 싶은 것」のように，それぞれ「～ヒト／～こと／～もの」，「～사람(人)／것(もの)／일(こと)」などを主名詞として，統語的な構成を成している所有物名詞句が頻繁に観察される。それに対して，「もつ」や「가지다/갖다」においてはこのような表現は生産的ではない。

また，「もつ」の場合と「가지다/갖다」の場合を比べてみると，「もつ」においては変化性のない恒常的所有に「タ形」を用いないのに対して，韓国語の「가지다/갖다」においては過去形による表現が珍しくないという点が異なる。これは日本語と韓国語の過去形のアスペクト的性質の違いに起因すると考えられる。

さらに，「가지다/갖다」においては，「〈身体〉+ 가지고/갖고」の形でもって「～にもかかわらず／～くせに／～のに」という意味を表す用法が目立つのに対して，日本語の「もつ」にはこのような用法は見られない。該当する韓国語の例としては「그 얼굴을 가지고 (lit.その顔をもって)／그 몸을 가지고 (lit.その体をもって)」のような例があげられる。所有物の分布に関する計量的調査に基づくと，「もつ」に比べ「가지다/갖다」において〈身体〉類の所有表現が比較的高頻度で現れているが，これは前述の用法に影響を受けていると考えられる。

次に，「する」と「하다」については，いずれも〈身体〉〈属性〉の所有以外には使われないという傾向がある。これは，「する」に関する角田太作(1991) の指摘を裏付ける結果となった。本論文の調査に基づいてさらに補充すると，〈属性〉のなかでも，「ヒトの身体に関わる事柄」のほか，「事物の外見に関する事柄」とりわけ「形／色」を表しているものがほとんどであり，かなり限られた範囲の〈属性〉に用いられている。

角田太作(1991) の「所有傾斜」で提示されている所有物のほか，所有動詞の形態・統語的なふるまいに影響を及ぼす所有物のカテゴリーとして，〈部分〉〈関わり相手〉〈財産〉〈精神活動〉〈所持品〉〈活動〉という新たなカテゴリーを提示した。

【第Ⅱ部—連体修飾の所有表現】

角田太作(1991) は，「する，所有する，持つ，ある，いる，の」について，それぞれの所有物の分布を「所有傾斜」上に示している。ところが，所有動詞の連体修飾用法および所有物の分類度をはじめとする，実例に基づく使用実態については調査を行っていない。

本論文の第II部では，連体修飾の所有表現を取り上げ，それぞれの所有物の分類度および，[Pr-Pe] 型と[Pe-Pr] 型という構造の違いによる使用実態を，具体的な言語現象とともに対照言語学的な観点から記述した。さらに叙述用法と連体用法の間に見られる違い，連体用法における所有動詞と属格構造の相補的分布を明らかにした。

まず，「ある」においてはNP_1を充たす名詞の「トコロ性」に関する制限があり，「いる」においてはNP_1の「トコロ性」のほか，NP_2の「有情性」の制限も加わって，「所有」とみなしうる例は，[NP_1 にある/いる NP_2] すなわち [Pr V Pe] ではなく，[NP_1 がある/いる NP_2] すなわち [Pe V Pr]の形をとるのが一般的である。韓国語の「있다」に関しても同様な傾向が見られる。

「もつ」と「가지다」においても，[Pe V Pr] の表現は「恒常的所有」から「一時的所有」にわたって幅広く用いられているのに対して，[Pr V Pe] の表現は比較的非生産的である。とりわけ恒常的な性格の強い〈身体〉〈部分〉〈親族〉は，[Pr V Pe] の構造で表現されにくいといえる。

「もつ」と「가지다」と活用形に注目すると，[Pe V Pr] における「もつ」の「タ形」と「ル形」は，通常，意味的に対立をなしておらず，いずれも「가지다」の連体過去形「가진」と対応する。

また，「가지다」の連体過去形「가진」は，[Pe V Pr] に限らず [Pr V Pe] においても静的な事柄を表しうるのに対して，「もつ」の「タ形」は，[Pr V Pe] となると「動的」な表現にしか用いられないという点が注目される。

さらに，「もつ」の「テイル形」と，それに相当する韓国語「가지고 있는/갖고 있는」は，いずれも [Pr V Pe] においては頻繁に使われるのに対して，[Pe V Pr] となると使用頻度が著しく低くなる。以上のような現象は，[Pe V Pr] におけるアスペクト的性質の捨象を反映している。

次に，静的な事柄を表す「する」と「하다」の連体修飾用法については，「する」と「하다」のいずれも，叙述用法に比べ所有物として現れる語彙の種類がさらに制限される。〈身体〉を指し示す名詞は，「する」の場合は「顔」のみであり，「하다」の場合は「얼굴（顔）／눈（目）／몸（身）」の 3 種類しか観察されない。〈属性〉に当てはまる語彙は，それぞれ「形／形態／色」「모양（模様）／모습（姿）／형태（形態／색（色）」がほとんどである。

「する」と「하다」においては，主語名詞句が対格名詞句の前に置かれると「動作動詞」として捉えられてしまうため，所有表現は [Pe V Pr] に限られる。

日本語と韓国語における属格構造の所有表現は，いずれも次の点において所有動詞による連体修飾と大きく異なる。属格構造による「所有」では，[Pr-Pe] 型でもって「普通所有物」を限定する連体修飾機能が主要であり，[Pe-Pr] 型の表現は極めて限られている。

[Pe V Pr] において「ある/いる」と「있다」による「連語構成」の表現が目立つこと，[Pe V Pr] において「もつ」と「가지다/갖다」のテンス・アスペクト形式が意味的対立をなさないこと，また「する」と「하다」による所有表現は [Pe V Pr] に限られるという現象は，すべて [Pe V Pr] 型における所有動詞の文法化の現れであると考えられる。そしてこのような現象は，属格構造において [Pe-Pr] 型の所有表現が非常に限られるということと密接に関わっている。

[Pe-Pr] 型の所有表現は，意味構造において「措定コピュラ文」および「形容詞文」の機能に移行しつつあると思われる。「丸い形の柱（所有）／円形の柱（属性叙述内在型）／丸い柱（形容詞句）」や「赤い色の花（所有）／赤色の花（属性叙述内在型）／赤い花」におけるそれぞれの表現が同じ意味を表すということにそれは端的に現れている。